

豊かな海を求めて 一部の下水処理場排水について排水基準を廃止すると

豊かな海とは何か？ 海藻が生い茂りそこには多くの種類の魚が泳ぎまわる。また、十分な量の魚介類を食卓へと提供してくれる。ざっとこんなところでしょうか。

瀬戸内海、特に播磨灘のイカナゴの不漁や、ノリの色落ちの原因が、海がきれいになりすぎたためであり、その解決策として、栄養を海に流し込めばいいのではないかの考え方である。

江戸時代には田畑に糞尿（し尿）はもとより多くの肥料、たとえば干鰯(ほしか)や油粕などを施した。干鰯（ほしか）とは、鰯（いわし）を干して乾燥させた後に固めて作った肥料のことであるが、瀬戸内海で採れたイカナゴも肥料として使われていたようである。私の記憶が確かならば、昭和 30 年代には、ペルーからアンチョビー（カタクチイワシ）を肥料として購入していた。

江戸時代には、大地にまかれたこれらの肥料の内の植物に吸収されなかった分は、急峻な河川を通して海へと流れていっただろう。農地から海に至るまでの時間は短かった。

ところが最近はその事情は大きく変わってきている。農村にも農地から出た水の処理設備が作られる。河川には多くのダムが作られ、水がゆっくりと海へと至ることから栄養素の発生場所と海との時間的距離が長くなった。この伸びた時間に栄養素は藻類などの繁茂に使われ、海に必要な栄養素の形で届く部分は減少したのではないだろうか。勿論、下水処理場はこの栄養素を減らす原因となっている。

戦前の栄養循環に戻そうとすると、バキュームカーで汲み取った糞尿を、瀬戸内海の真ん中で散布する。歴史的に考えて、これが最も無理のない形ではなかろうか？ 昔、美嚙川が加古川に入る部分に、多くのし尿がオープンに貯められていたのを思い出す。このし尿は洪水と共に加古川を下り、瀬戸内海に至ったことは間違いない。

